

孤島の若者

—『潮騒』の作者三島由紀夫へ—

例年より半月も早く訪れた梅雨も、どうやら末期に近づいたらしく、晴れ間に顔を見せる太陽は、すでに真夏を思わせる光を遍満させます。

その後お元気のことと思います。小生もどうやら昨今しだいに健康を増し、これまで計画倒れになるのではないかと怖れた仕事も、これからひとつひとつ片づけて行けそうな体力と気力をとりもしました。齡五十の坂を越えて、さまざまな感慨にとらえられることもありますが、それとともに、俗悪な現象に対して反措定的に頭をもたげた、ある種の力が体内にみなぎってくるのを感じるときがあります。それにつけ、これからさき貴君がつぎつぎと労作を発表してゆかれるのを、待ちうける思いが切実に起こってくるのです。

待ちうける——といえば、今までの貴君のどの作品よりも熱心に待っていた力作『潮騒』、去る六月十一日、たしかに落掌しました。いつもながらの御厚情、深謝します。

さっそく通読しました。強い感動をうけました。すぐに礼状を出すべきでしたが、読後感めいたものを多少でも付け加えるのが、礼にかなっていると思ひ、それには、この感動のよってきたるところを、ある程度つきとめる必要があり、つい心ならずも延引してしまいました。どうか悪しからず。

読后感といつても、まとまったことは何も書けそうにはありません。おまけに自分流のうけとり方となつておると思ひますが、とにかく思ふままを書いてみることにしましょう。

小生の読みとつたところでは、この作品の末尾の、「少女の目には矜りがうかんた。自分の写真が新治を守つたと考へたのである。しかしその時若者は眉を聳やかした。彼はあの冒険を切り抜けたのが自分の力であることを知つてゐた。」という、原文で三行に書かれた部分に、主題の凝縮が見られるように思ひます。これを主軸として、周回一里に充たない伊勢湾口の孤島歌島を舞台とし、一人の若者——「背丈は高く、体つきも立派で、顔立ちの稚なさだけがその年齢に適つてゐる」、「これ以上日焼けしやうのない肌と、この島の人たちの特色をなす形のよい鼻と、ひびわれた唇を持ち」、「海を戰場とする者の海からの賜物で、決して知的な澄み方」はしてないが「黒目がちな」「よく澄んでいる」目をもつた若者と、一人の少女——「綿入れの袖なしにモンペを穿き、手には汚れた軍手をしてゐる」、「健康な肌いろはほかの女たちと変らないが、目もとが涼しく、眉は静かであ」り、今し、激しい海辺の作業を終わつたあとの、「額は汗ばみ、頬は燃

え、「寒い西風はかなり強かったが」、「作業にほてった顔をそれにさらし、髪をなびかせたのしんでゐるやうに見え」、その「目は西の海の空をしっと見つめてゐる（そうだ、貴君のたびたび使う言葉によれば、『待ってゐる』目の色である！）」少女を登場させ、明かると太陽と絶え間ない潮のとどろぎに伴奏されながら、二人の純潔で健康な恋が徐々に成熟し、最後の冒険を機として急速に結実します。

「都塵」とうんざりするような事件の充満する「社会」とから隔絶した自然と、旧式に見えるひとつの道徳とのなかで、二人はたくましく自由に生きてゆく。そこにはほんとうの意味の生活があった。「自分の力」を信ずることのできる明日の人間像が、克明に造型されています。

この作品自体が、新しい生活とモラルの実験であり、貴君の現代に対する変わった形の抗議であると愚考します。この書からうけた感銘が、『アポロの杯』のなかのギリシャ紀行からうけたものに、自然にづらなっているのは、すぐ気づくことですが、さらに貴君の初期の作品、例えば『花ざかりの森』あたりから見える「海」へのあこがれが、ここに一編の記念すべき作品を結実させたことを指摘した批評家がいるかどうか、小生にはわかりません。いつか一緒にお宅へお邪魔した光島章一が、貴君を前にして、「三島さんの作品にはカミュのアルゼリヤの強烈な太陽の光に共通するものがある」といった言葉も、ここで思い合わされます。貴君の主題展開の最適の場が、決して「山」になく、「海」に、それも「南の海」にあることは、小生のつとに知りえて

いるところです。

もう一つ付け加えることを許されるならば、前にもちょっと触れましたが、「待ってる」ポーズが、正確に言えば「待つことを知ってゐる」ポーズが、若者の上にはしばしば見えることです。「真夏の死」の終りにも、女主人公の上に、「待ってる」という言葉が何度か使われていますが、この言葉は、小生には迂濶に読みすぎることのできないものです。永年親しんできた王朝の女性たちの、あの悲しみに限どられたポーズにも通うものですが、「待つことを知ってる」とは、「自分の力を知ってる」と別ではないと思います。さらにいえば、「待つ」ことは「堪へる」ことにすぐ結びつきます。

ともかく、小生がこの数年来もちつづけた主題が、三島由紀夫に本質する発想と方法によって実に見事に造型されていることを知った歓びで、胸がいっぱいです。こんなうけとり方は、随分勝手な理解だといわれるのは覚悟の前ですが、小生にとっては、これはこれでいいのだと思います。

以上、礼状のつもりで筆を執ったのですが、結果は不得要領な感想文になりました。昔のよしみで、失礼をも省みず書いてみました。御判読を乞う次第です。

最後に、貴君の存分の御活躍を心からお祈りします。

(昭和二十九年七月)